

# 女性のフレイル

—これまでとこれから—

Miyao Mariko

宮尾益理子

公立学校共済組合関東中央病院 健康管理センター長

## はじめに

2014年に日本老年医学会は、Frailtyの日本語訳として使われてきた「虚弱」を「フレイル」と表すこととし、ステートメントを発表した。

老年医学的な「Frailty」という概念は、しかるべき介入により健全な状態に戻る可能性のある可逆の状態であり、身体的側面に加えて、精神心理的、社会的側面がある「可逆性と多面性」を持つものである。「虚弱」という言葉は加齢に伴って不可逆的に“老い衰えた状態”という印象を与える。そのため、「フレイル」という言葉とともに、高齢者の健康寿命の延伸のためには、多面的にしかるべき介入をすることが必要である、ということの重要性を表すためにステートメントが出された。新しい概念である「フレイル」に関しては、定義、診断基準、スクリーニング法、介入法、栄養や運動によるフレイルの1次、2次予防まで、多岐にわたるアプローチが必要となり、本誌の各項で述べられている通りである。このステートメント発表から、わずか3年であるが、医療・介護業界の専

門誌のみならず、一般のマス・メディアで取り上げられることも多く、その浸透は驚異的である。わが国は高齢化率が17.3%となった2000年に介護保険制度を導入した。これは、要介護高齢者の増加、介護期間の長期化による介護のニーズの増大と、核家族化の進行、介護者の高齢化など、家族による介護の限界を背景に、「社会全体で支え合う仕組み」として創設された、高齢者の自立支援を理念とし、利用者が保健医療サービス、福祉サービスを選択できる利用者本位の制度で、社会保険方式を採用している。2000～2015年の15年間の対象者、利用者の推移では、65歳以上の被保険者が、2,165万人から3,308万人と1.53倍の増加に対し、要介護認定者数は、218万人から608万人の2.79倍の増加、サービス利用者は149万人から511万人と3.43倍に増加し<sup>1)</sup>、介護保険は高齢者の介護に広く利用されている。このことは、「要介護状態」の持つさまざまなことを社会、個人が身をもって実感し、その対策が急務であるが、従来の「疾患」対策では不十分であることを示すことともなった。疾患予防ではなく“フレイル”対策である。